様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ８ 月　 ９ 日現在

機関番号：１４６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１１３０

研究課題名（和文）国際バカロレア導入によるグローバル化に対応した中等教育に関する研究

研究課題名（英文）A Study of secondary education to correspond to globalization by implementing International Baccalaureate

研究代表者
渋谷　真樹（Shibuya, Maki）

奈良教育大学・教育学部・教授

研究者番号：８０３２４９５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、駐在員家庭、国際結婚家庭、在日外国人家庭のみならず、一般の日本人家庭にも国際バカロレア（IB）が選ばれていることを明らかにした。学校管理職は、IBの利点として、新しい教育観に基づいた主体的能力を身に付け、高等教育の選択肢を国内外に広げることを挙げていた。IB生は、少人数での双方向的な学びに満足していたものの、大学進学への制約や他の生徒との距離に遺憾の意を表する生徒もいた。
　もっか、IB校は増加しており、国公立のIB校もあらわれている。とはいえ、学校や家庭への経済的負担は大きい。また、国際教育と国民教育との関係や、IB生と一般生徒の連帯感、国際的な競争に関するリスクも存在している。

研究成果の概要（英文）：International Baccalaureate (IB) is chosen not only by returning families, families between different nationalities and foreign families living in Japan but also by regular Japanese families. School administrators of IB schools recognize that the merits of implementing IB include nurturing active learning skills based on new pedagogy and broadening choices of higher education both within Japan and abroad. IB students are satisfied with active learning in small groups, while some are unsatisfied with limited choices of higher education and distance from regular students.
The number of IB schools are increasing. Although some public IB schools have emerged, implementing IB forces schools and families financial burdens. Also we need to consider there are some risks in terms of relationship between national education and international education, bond between IB students and non-IB students, and competition beyond national borders.

研究分野：教育社会学

キーワード：多文化教育　国際バカロレア　グローバリゼーション

１．研究開始当初の背景

教育のグローバル化が急務になっている。また、経済産業界からの「グローバル人材」育成の要望も高まっている。そうした中で、国際理解教育を促進し、国際的に認知された大学入学資格を提供する国際バカロレア（以下、IB）が注目を集めている。政府は、IB 校を 2018 年までに 200 校程度に増加させる方針を打ち出し（「日本再生戦略」、2012）、研究校指定や大学への周知を行う他、一部の科目を日本語で行うデュアル・ランゲージ・ディプロマ・プログラムを導入して、その実現を図っている。

IB は、UNESCO が提唱する理想としての国際教育を目指すだけではなく、グローバル企業の要請にも適合している。一方で、申請費や年間加盟費、教師研修などに少なからぬコストがかかることが問題である。さらに、教員の確保や学習指導要領の定める教育課程との整合性など、日本における IB の普及のためには、いまだ検討すべき点も多い。

２．研究の目的

本研究では、

Ⅰ．グローバル化する教育現場や多文化的環境の中で育つ子どもの教育の現状や課題を把握し、

Ⅱ．IB の教育理念やカリキュラム、実践を踏まえた上で、

Ⅲ．日本の中等教育に IB または IB に類した教育を導入する利点や課題について明らかにする。

とりわけ、教科以外の教育活動に注目し、多様な文化的背景をもつ子どもたちが共に学び、グローバル社会に適応できる能力を身につけるための IB の有効性や留意点を考える。

３．研究の方法

Ⅰ．　駐在員家庭、国際結婚家庭、外国人家庭、一般の日本人家庭に対して、多文化状況下の教育の現状や課題について調査する。

Ⅱ．IB の教育理念、カリキュラム、実践を把握する。

Ⅱ－１　IB（特に CAS）の目的・内容等の検討：2014 年度を中心に IB の公式文書や先行研究（Journal of Research in International Education など）の検討。3 年間を通してワークショップに参加。

Ⅱ－２　国内の IB 校およびイギリスの IB 校に訪問調査を行い、学校経営者・教師・生徒へのインタビューを実施する。

Ⅲ．国際教育に関する議論を参照しつつ、日本の教育ニーズと IB 教育の内実との整合性を考察し、日本への IB 導入の利点や課題を検討する。

４．研究成果

本研究では、先進的に IB を導入している学校に訪問し、授業や行事の参観や、管理職や教師、生徒への聞き取り調査を行った。その結果、本研究からは、駐在員家庭、国際結婚家庭、在日外国人家庭のみならず、一般の日本人家庭にも国際バカロレア（IB）が選ばれていることが明らかになった。

学校管理職に対する聞き取り調査からは、IB の利点として、新しい教育観に基づいた主体的能力を身に付け、高等教育の選択肢を国内外に広げることが挙げられていた。学校管理職は、探究力や批判的思考力、他者と協働する力等、現代社会で求められる力を育てる教育として、IB を評価している。IB は、文部科学省が推奨する新しい教育の具体的な方策を示している、との声もあった。グローバル化が進行する現代、中等教育の改善のためにも、新しい高大接続としても、また、グローバル人材の育成としても、IB が注目されていることがわかった。

IB を受講する生徒（以下、IB 生）に対する聞き取り調査からは、少人数での双方向的な学びに満足しているという声が多く聞かれた。IB 生達は、少人数クラスでの議論やプレゼンテーションを楽しみ、IB によってコミュニケーション力や思考力、大学で学ぶための学術的な力等が身に付くと語っている。また、IB 生達は、同じカリキュラムで学ぶ他国の IB 生達との交流の機会をもっていた。「異なる価値観をもつ他者と共生できる若者の育成」というミッションの下に学んだ若者達は、グローバル・シチズンとして活躍の場を広げていくことが期待される。このような IB の導入によって、日本の高校教育は、＜新しい能力＞を体系的に育成する方向へと改善する可能性がある。知識の吸収量から自律的な学習力へと能力観が転換する今日、IB は、高校教育を刷新するひとつの有力な道筋を示している。

しかし、日本の大学における IB の認知度はいまだ不十分で、IB を使った進学には制約がある、と述べた IB 生もいた。また、経済的な理由で、海外の大学への進学を断念している生徒も複数いた。

さらに、IB 生と他の生徒とのあいだに距離があると述べた IB 生もいた。同じ学校であっても、ちがった教育理念やカリキュラムで学ぶ生徒たちには、誤解が生じる可能性も指摘された。ごく一部の生徒が、よりよいと目される教育プログラムを別個に受けている状態は、日本国内で学ぶ生徒間に予期せぬ亀裂を生み出しかねない。

ひとつの学校の中に教育内容や指導体制が異なるグループがあり、かつ、相互の交流が限定されている場合、グループ間に誤解や対立が生じ得る。IB 生は、一般生とは異なった学習経験を重ね、別様の資質を身につけていく。しかも、彼らは、IB の卓越性を称える言説に囲まれており、自分達の習得した能力を高く評価している。すなわち、IB 生は、従来型の教育を受けている同輩に比べて、より多くの＜新しい能力＞を獲得していると自

負しているし、従来型の教育は、無味乾燥で受け身なものと認識されている。

くわえて、IB 生の中には、部活動や学校行事といった「高校生らしい」生活ができないことを口惜しく感じている者もいる。日本の学校は、学級や部活動など、同質性が高く、閉じられた集団内での連帯感や協調性を強調し、価値の対立する領域に踏み込むことには敬遠しがちである。それに対して IB は、より能動的な市民の育成を目指しており、生徒はモラトリアムを脱して、若い市民として自立することを求められている。そうした中では、海外に開かれた者達と日本国内に留まる者達とのあいだに、壁や偏見が生じかねない。IB 生は、庇護された高校文化の親密圏にこもっている同輩達を羨む一方で、もどかしく感じているようにみえる。

アメリカの政治経済学者・ライシュは、国境を越えてネットワークを広げる人々は往々にして、一国内のみで生きる人々とは共通性を失っていくと述べている。世界中で同じ理念とカリキュラムの下で学ぶ IB 生達が、国籍を越えた連帯感をもつ可能性は大きい。けれども、世界に開かれた教育を謳う IB の導入が、期せずして国内での二極化や非寛容さにつながることがないとは言えない。

教育の卓越性を追求する際の公正さや共同体意識の行方に、注視が必要である。たとえば、IB 生と一般生とが親密な交流をもち、IB 生も日本の社会に帰属意識をもてるようにすることが必要であろう。同時に、一般生も海外につながる経験をもちながら、納得して日本の教育を選択できるような環境づくりが求められるだろう。

本研究では、IB 導入によって国境を越えた高大接続が可能になるだけでなく、高校での多面的な学びが評価され、グローバル化に対応した若い市民の育成が促進する可能性があることが明らかになった。日本の高校への IB の導入は、国境を越えた大学進学を可能にする。IB は、欧米を中心とした多くの著名大学で評価されている。くわえて、文科省は、日本の大学での IB 資格を利用した入試を急速にすすめている。よって、理念的には、IB は教育の国際通用性を高め、生徒・学生の国際移動を促すと言える。

しかし、現実には制約がある。ひとつは、家庭の経済負担である。国公立を含めた IB 校が徐々に増え、IB は以前より享受しやすくなっている。それでも、現状では IB 生はごく少数である。多くの場合、IB の履修には追加の学費が求められることに加えて、高校入学までに学習言語としての英語力を習得するためには、親の駐在等で海外の英語媒体の学校で学ぶか、私立のイマージョンスクールや国内のインターナショナル・スクール等で学ぶことが必要である。それが、生徒本人の意欲や能力、努力だけではままならないことは自明である。

まして、海外大学進学には、奨学金があるとはいえ、大きな経済的障壁が立ちはだかる。また、国内進学をする場合には、日本の大学は IB を認識し始めたとはいえ、いまだ不十分である。

今、異なる能力観に基づく、ふたつの高大接続のルートが存在している。ひとつは、幅広い知識を早く正確に再生することを重視する従来型の大学入試であり、もうひとつは、特定の課題を深く探求し論理的に表現させる IB 入試である。こうして集まる多様性を生産的な学び合いにつなげるためには、別の基準で選抜された者同士の公平性を担保する必要がある。

IB 生が高く評価する少人数制や教員率の高さは、集中的な投資や大きな受益者負担によって成立しているのであって、万人に開かれているのではない。現行の大学入試が存続するならば、そこで測られる能力の価値がもっと積極的に評価されなくてはならない。同時に、＜新しい能力＞を習得する機会が、より多くの人々に提供されなくてはならないだろう。

さらに、IB の導入は、日本の教育が欧米の基準による競争に組み込まれ、学校文化や生徒・学生間の関係を変質させる可能性もある。国内外の大学が並列に選択されるようになれば、日本の大学も海外の大学との競争に組み込まれていくことになる。すでに大学の国際ランキングは複数あるが、イギリスのように国内統一試験と IB との換算がなされるようになれば、国内外の大学を一元的に序列化することが可能になる。そうなれば、国境を越えた大学間の競争が過熱すると同時に、グローバルに競争する大学とローカルな人材育成を担う大学との国内格差も広がっていくことが予想される。

また、IB 機構は、非営利とはいえ、特定の教育プログラムを有償で提供する団体であることに留意すべきである。たとえば、知の理論（TOK）と呼ばれる IB の必修科目は、批判的な思考力を育成するひとつの方法だとしても、それが唯一ではない。

学校で評価される語り方や表現の仕方は、文化によって異なっている。IB は、多様な学びや経験を特定の語り方に収斂させる、よくできた装置とも言える。IB をグローバル・スタンダードとして鵜呑みにせず、よく咀嚼しながら、日本の教育の中に位置付けていく必要がある。

もっか、IB 校は増加しており、国公立の IB 校もあらわれている。とはいえ、学校や家庭への経済的負担は大きい。また、国際教育と国民教育との関係や、IB 生と一般生徒の連帯感、国際的な競争に関するリスクも存在している。今後は、より多くの生徒がグローバルな視点や＜新しい能力＞を習得できる機会を保障する必要があるだろう。同時に、IB が、世界を股にかけて自己の便益を追及する人物ではなく、国内外の弱者にも配慮しうるエリートを育てていけるような工夫が必要

であろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）
渋谷真樹「国際バカロレアにみるグローバル化と高大接続－日本の教育へのインパクトに着目して－」『教育学研究』83-4, pp.423-435, 2016
陳玉玲、渋谷真樹「台湾における国際バカロレア導入の現状－海外大学への進学と教育方法に着目して－」『台湾における国際バカロレア導入の現状－海外大学への進学と教育方法に着目して－』2, pp.147-155, 2016
渋谷真樹「一条校による国際バカロレア導入の意図と背景－学校管理職の語りから－」『国際理解教育』21, pp.3-12, 2015

〔学会発表〕（計　1　件）
Maki Shibuya et al. The analysis of the implementation of the IB (including the Japanese DP) in Japan, IB Global Conference, Pacifico Yokohama, March 29 2017

〔図書〕（計　1　件）
志水宏吉他編、渋谷真樹他著『日本の外国人学校－トランスナショナリティをめぐる教育政策の課題』明石書店、2014

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
（　渋谷　真樹（SHIBUYA Maki）
奈良教育大学・教育学部・教授　）

研究者番号：80324953

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）